
ラドナの塔の主

猫に小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラドナの塔の主

【Nコード】

N2393I

【作者名】

猫に小判

【あらすじ】

大陸北部の強国、エルリオン王国。そこに存在する22の【塔】のうちのひとつ、王国東部に位置する田舎の領地ラドナにある【塔】の主、リアシア・ティンベル。彼女とラドナに住まう人々が繰り広げる、他愛もない日々のお話。

プロローグ 月夜の2人

大陸北部の強国、エルリオン王国。

現在、この国には22の【塔】があり、22人の【塔の主】がいる。

そのひとつ、王国東部のラドナ地方にある【塔】の前で、2人の人物が夜空を見上げていた。

空気の澄んだ冬の夜空には、何処までも深い闇と、明るい星と、満月が輝いていた。

美しい夜空だった。そして、優しい夜空だった。

ラドナの【塔】の主とその伴侶は、夜空を見上げて、互いに微笑みあった。

そして、【塔】へと帰って行った。

2人が初めて会ったときと変わらぬ夜空が、2人を優しく見つめていた。

たとえ明日、いつもと違う日常が始まるとしても。

幸あるとき、禍あるとき、どんなときでも、2人はずっと一緒にいるのだ。

いつまでも、いつまでも。

ブローグ〜月夜の2人〜（後書き）

ブローグは短いですが、基本的に一話ながーい長文かつまったり更新になりますので、お暇なときにどうぞ。

01：ラドナの春の感謝祭（1）

ラドナ地方は、大陸北部の強国であるエルリオン王国東部に位置する、面積だけは広大な土地だ。土地の広さの割りに、住んでいる人の数はそれほど多くない。

周囲をぐるりと山に囲まれた自然に恵まれた土地で、一年中温暖な気候をしており、四季の移り変わりも緩やかだ。主な産業は土地を活かした農耕・牧畜、そして果樹の栽培だ。ラドナで採れた自然の恵みと人々の努力の結晶は、加工され、あるいはそのまま、王都近辺にまで出荷されている。

このラドナ地方を治めているのは、王国最古参の貴族のひとつ、アデルイード公爵家だ。

約800年の歴史をもつこの公爵家は、国内どこるか大陸全土においてもかなり特殊な位置にある貴族で、どういうわけだかこのラドナ地方に引きこもって、滅多に王宮に赴かない。

ほとんどの貴族が参加する晩餐会や舞踏会、はては各貴族の家の当主と国王らが話し合う議会の場にすら、滅多に姿を現さないのだ。それでも全く罰されたりせず、没落していないあたりに、アデルイード公爵家の特殊性がよく分かる。

そして、現アデルイード公爵は、代々のアデルイード公爵がそうであつたように、若干変わり者だ。

ゆえに、代々変わり者の貴族に治められてきたラドナ地方の人々もまた、変わり者が多い。

いい土地なのだ。

王都から離れた田舎ではあるが、800年間、アデルイード公爵が非常によく統治してきたため、ラドナ地方はただの農耕・牧畜・

果樹栽培しか取り柄のない土地でありながら、実質的な税収は貿易の盛んな王都近辺の地方とさほど変わらない、かなり裕福な土地だ。

そして、ラドナに住まう人々もまた、穏やかで仕事熱心な、まったりとした性格の人が多い。王都のような刺激はないが、のんびりとした老後を過ごすには最適な土地なのだ。

そう、穏やかに、まったりと過ごせるはずだ。

「変わり者」な住人たちに慣れることができれば。

そこまで考えて、リアシア・ティンベルは頭を振り、愚かな考えを頭の中から追い出した。

無理だろう、これ。すぐには慣れないって。

そう思いながら、目の前の光景を見つめる。

彼女の灰色の瞳が見つめる先には、

「マアチイルウダアアアアアアアア！！好きだあああああ！！」

「マリアアアアアアア！！！愛してるうううう！！」

「セーラアアア——！！大好きい——！！！！」

ラドナ地方の中心部にある、領主の館が建っているシュレ区。

その広場にある、美しい花々で飾られた、ラドナのお祭りの際に特設される大きな舞台。その上に立つ、手に春に咲く花々を豪華に束ねた花束を持ち、頬を上気させ瞳を煌かせながら、大声で力の限り愛を叫ぶ老若男女、その数40人あまり。

彼らが恥ずかしげもなく愛を叫んでいる相手は、舞台の正面方向にある、大きな噴水。その前に設けられた大きな囲いの中にいる存在——鶏である。

鶏。鶏なのだ。本当に。普通にどこにでもいる、鶏1羽。

しかし、ただの鶏ではない。御年2才になる、メスの鶏。

彼女はただの鶏でありながら、先頃ラドナの家畜小屋を荒らしまわっていた大型の野犬二頭を退治した、勇猛果敢な鶏なのだ。

だからどうした、とリアシアは思う。

その鶏が鶏であることに、何ら変わりはない。

その勇猛果敢な鶏は、元々はラドナ南西部にあるルタ区の村に住んでいた、ジユミニという老人が飼っていた。

しかし、春の1の月に入つてすぐ、ジユミニ老が亡くなってしまったため、世話をする人がいなくなってしまった。

ジユミニ老には家族がおらず、近所付き合ひもそう盛んではなかった。そういう人の遺産の処理は通常、故人の家がある区の役所が行う。ジユミニ老が飼っていた2頭の驢馬と数羽の鶏はルタ区の住人の中から希望者を募つて、彼らに引き取ってもらふことになった。そこで最後まで引き取り手が出なかったのが、この鶏だった。

何故かという、とても凶暴だったため。

引き取り希望者の人々の手を突付き、蹴りつけ、威嚇して暴れまわる。希望者たちはそれはもう、悲惨なことになったそうだ。

とてもじゃないが手に負えない、ということ、この鶏は領主であるアデルイード公爵が貰い受けることになった。公爵は話を聞いて、快く引き取りに来た。

なんでそこで領主様が出てくるのかな、とリアシアは思う。

公爵に暴れ鶏を引き取らせる役所の人間、というものが存在していいのか。

引き取りに来る公爵も公爵だが、役所の人間、それでいいのか。

身分は気にしないのか。

そもそもアデルイード公爵は一応、国内で12家しかない公爵家、それも王国最古参の大貴族の当主だ。そんな方が何故わざわざ鶏1羽を自分で取りに来るのだ。そういうのは本来、召使いの役目ではないのか。

鶏は、さすがにアデルイード公爵に対しては大人しかった。

それはそうだろう、何せ相手はアデルイード公爵だ。危機察知の本能が人間よりもきちんと残っている鶏が、彼相手に暴れるはずがない。

アデルイード公爵は、暫くはその鶏を領主の館にある庭先の小屋で飼育していた。そうして幾日か過ぎた頃、公爵の元に野犬による家畜の被害の報告が入った。ルタ区の村の家が数件、夜中に被害に遭い、鶏を全部で35羽ほど食い殺されてしまったのだ。

近年、春先に野犬の被害が出たことはなかった。冬の時期に蓄えのない野犬や狼などが村に出現するため、その時点で害獣に対する『狩り』が行われるからだ。今回の事件は恐らく他の土地から移ってきた野犬がルタ区にある山にねぐらを作り、そこから出てきて家畜を襲ったのだろう、という結論に達した。

大事な家畜を殺された人々の怒りは凄まじかった。

ルタ区の被害に遭った村の人々や、その他の村の有志が集まり、公爵とルタ区区役所所長の指揮監督の元、山狩りが行われることになった。

その、山狩り決行日の前日の深夜。庭先に出て月を眺めていたアデルイード公爵は、急遽作られた鶏小屋にいた鶏が、器用にも嘴で小屋の扉を開ける現場を目撃した。

何をするのかな、と好奇心にかられた公爵は、わざわざ鶏の方へと近寄っていった。鶏は公爵の存在に気がつき、彼を見た。そして、何かを訴えるように、バサバサと羽を暴れたした。

公爵は少しの間考え込んで、それから鶏を抱き上げると、転移術

式を使って——公爵は魔術師なのだ——鶏を、元の飼い主であるルタ区のジユミニ老の家に連れて行った。公爵は、鶏が郷愁の念に駆られたのかな、と思ったそうだ。

鶏に郷愁の念があるのだろうか、とリアシアは思う。

あと、鶏小屋に鍵くらいつけるよ、とも。扉を嘴であける鶏も鶏だが。

公爵は、現在は空き家になっている状態の小さな家を、暫し眺めた。と、そこで突然、彼が腕に抱いていた鶏が暴れ出した。

なんだか地面に降ろせと要求しているようだな、と感じた公爵は、そつと鶏を地面に降ろしてやった。鶏は、一目散にジユミニ老宅の裏へ走っていった。公爵は驚きつつもその後を追った。

ジユミニ老宅は領地境の山に近く、鶏は山の方に向かって行った。そして、公爵は、ちょうど山から黒い塊が数体下りてくるのを見た。塊は、通常の犬よりもふた回りは大きな犬だった。それが、全部で7体。恐らく、この犬たちが問題の野犬だろう、と公爵はピンときた。

野犬の被害が出てからというもの、ルタ区の家畜を飼っている家には公爵が簡単な結界を張っているので、そのまま野犬を見過ごしても別に問題はない。しかし、あるうことか、鶏はその野犬たちに猛然と襲いかかったのだ。

同胞たちを殺された鶏の攻撃は凄まじかった。というか、他の鶏たちが野犬に襲われたことなどは、彼女は知らない筈だ。しかし、鶏の攻撃は止まない。走り、蹴り、激しい突きを行い、野犬を翻弄する。

アデルイード公爵は、鶏の勇猛果敢な姿にいたく感銘を受けた。そして、鶏に加勢した。公爵が魔術を発動させて、あつという間に5体の野犬を動けない状態にしたとき、既に鶏は2体の野犬の目を突き、蹴り倒して、戦闘不能にしていた。

むしろ人を呼べ、とリアシアは思う。

春の穏やかな月夜の晩に、獰猛な野犬と戦う鶏と領主様。奇妙すぎる光景だ。

騒動を聞きつけてやって来たルタ区の住人たちの手により、野犬は捕縛された。家畜に対して危害を加えた動物や人は、ラドナの決まりでは領主によって裁かれる。そのため、7体の野犬は領主の館に一時収監されることになった。

そして、2体の野犬を戦闘不能にした勇敢なる鶏。彼女の勇姿に感動した公爵は、この鶏に名前をつけよう、と考えた。しかし、公爵にはあいにくい名前が思い浮かばない。そこで、執事と相談して、領民から名前を募ろうと考えた。

別になんでもいいじゃないか、とリアシアは思う。

所詮、鶏の名前だ。いつそ『野犬殺し』とかでいいんじゃないか。強そうで。

ラドナに存在する5つの区の区役所全ての掲示板にて公示された、勇猛な鶏の名前の公募に対する応募者の数は、公爵の予想以上に多かった。

そこで、公爵と公爵家に勤める有能な執事、そして区役所の役人らが厳正に審査した結果、残った約40個の名前を、今日、この日、鶏自信に決めてもらう企画を立ち上げたのだ。

今日、このシュレ区の広場には、ラドナに住まう多くの人々が集まっている。

今日は春の2の月、15日。ラドナで春の感謝祭が行われる日だ。本来ならば、花の女神ジェニーレイに暖かな春の訪れの感謝を捧げる、お祝いの日なのだが。

「……なんで、鶏1羽の名前を決める大会がこんなに白熱してんだ？」

広場の喧騒から少し離れた場所。

リアシアの隣で、明るい茶色の髪に赤みがかった青い瞳をした男性が首を傾げつつ、不思議そうに呟いた。

この男性の名前をアル・ラッドといい、彼はラドナの住人ではないものの、しばしばラドナを訪れている絵描きだ。

年のころは20代後半、人懐っこい笑顔が目を惹く明るい性格の人物で、リアシアとも親しい。去年ラドナに引っ越してきたばかりのリアシアの、1番最初の友人となったのが彼だ。

そのアルも、今日のこの広場の異常な熱気には少々引き気味である。

現在、広場には人がごった返している。ラドナの住人たちは何故か、野犬を倒した鶏に感動して、その名前をつける栄誉を得たいらしく、我こそは！と鶏に愛を叫んでいる。舞台の上にはいない人々も、何故か鶏に各々が考えた名前と愛を叫んでいる状態。

「さあ……。毎年、1番盛り上がるのって、確か『花の女神』を決める大会でしたよね？」

ラドナの春の感謝祭では毎年、『花の女神』と呼ばれる、最も踊りの上手い女性を決める大会が行われる。参加条件は既婚・未婚、年齢を問わず、女性であること。

『花の女神』は大会に参加していない住人の投票によって選ばれ、見事『花の女神』になった女性には、感謝祭の最後の踊りの時間に、1番最初に踊る相手を選ぶことのできる権利が与えられる。

ちなみに、ほとんどの場合、『花の女神』は領主様を最初の踊りの相手に指名する。

いくら領民と仲がよくても、公爵は公爵。馴れ合いはできない。ただの平民にすぎない領民の女性が自分から公爵に親しく接することとは、常識的に考えて認められないのだ。

そのため、ラドナの決まりで「『花の女神』が選ぶ最初の踊りの相手には領主も含まれる」とされているこの日だけが、領民の女性が自分から公爵を踊りの相手に指名することができる日なのだ。

アデルイード公爵家は、代々絶世の美貌の持ち主を輩出する血族としても有名だ。

国内屈指の美貌をもつ美しい公爵は、まるで姫君を相手にするかのような優雅さでもって、見事に『花の女神』をエスコートする。それを見て、『花の女神』に選ばれなかった女性たちは、来年こそはと踊りの稽古に精を出すのだ。

しかし、今年はその『花の女神』を決める大会の時間を割いて、何故か鶏の名前を決定する大会が開催され、おまけに『花の女神』の大会よりも遥かに盛り上がっている。歓声も拍手も熱気も何もかも、段違いだ。

リアシアは去年、ラドナの『花の女神』を決める大会を見て、王都で開催される春の感謝祭とさほど変わらぬその熱気に圧倒されたというのに、今年は鶏の名前を決める、それだけの大会が何故かそれ以上の盛り上がり。

たかが鶏の名前を決めるのに、何故ここまで盛り上げられるのか。副賞も何もないというのに。リアシアには、ラドナの住人たちの心理がまるで理解できない。

「というか、この状態でどうやって決定するんだ？ 鶏の名前。『鶏自身に選んでもらう』って、どういう方法で？」

「さあ……。でもこの大会、領主様が考えられたんですね？」

「……多分、脱力するような方法なんだろうな……」

ラドナの住人ではないが、昔からラドナをよく訪れているアルは、公爵とも顔見知りだ。

ラドナに引きこもっている公爵に対して、他の土地の様子や噂話を話したりしているらしい。

そのため、アルはリアシアよりも公爵の人となりをよく知っている。その彼はどこか遠い目をして、「あの領主様が企画してんだからなあ……」とぼやいている。

『勇敢なる鶏の功績を称えて、彼女に相応しい名前をつけよう』
大会が始まってから、既に2時間近く。広場の熱気は最高潮に達していた。

「さあ！！ それではそろそろ、勇敢なる鶏様に、気に入った名前を選んでいただきましょう！！」

舞台の上の司会者（シユレ区区役所所長・声の大きさはラドナ1番）の言葉に、水を打ったように広場が静まり返る。

リアシアはなんで鶏に様付けするんだろう、と思いながら、事態を見守った。

春の感謝祭の実行委員たち（各区の区役所職員たち）が、鶏のいる囲いを取り外す。かなり煩い喧騒の中に2時間近くもいながら、不思議と落ち着いた雰囲気。鶏は、バサバサと羽を何度か動かした。そして——鶏は舞台の上に向かって、一目散に走り出した。人々の間をすり抜け、舞台へあがるための階段を駆け上がり、1人の人物の頭めがけて跳躍し、猛烈な突き攻撃を開始する。

「皆さん、決定いたしました！！ 鶏様を選んだのは、メノン区ジユタ村在住、ハワードさんです！！ 鶏様の名前は、『マリアンヌ』に決定いたしましたああああ——！！！！」

司会の大音声と共に、広場中に大歓声と拍手の嵐に沸き起こる。猛然と嘴による攻撃を続けている鶏を抱きかかえて、ハワード氏はそれでも笑顔だ。額からだら流血しているのに、笑顔。何かを全力でやり遂げた者の、会心の笑み。

「何か」――単に鶏の名前を決めたただけだが。

「……鶏の名前が『マリアンヌ』……」

えらく優雅な名前だ。どこの貴族の令嬢だ。

リアシアは首を傾げた。少なくとも、鶏につける名前としては、この上なく似合わないように感じる。『野犬殺し』の方がまだましではないか？

この瞬間にその鶏は、『野犬殺し』の『マリアンヌ』として、リアシアに認識された。

「なあ、リアシア。あれさー、俺にはあの鶏が1番気に入らなかった名前を言った人間を攻撃してるように見えるんだけど」

「私にもそう見えますよ……」

「あの鶏ってさ、賢いんだよな、多分。で、その鶏の名前を決めるためにわざわざこんな大会を企画して実行してるここの領主と住人って、賢いのか？馬鹿なのか？」

「答えにくい質問しないでくださいよ……」

「いや、ここの住人がいい人ばっかなのは俺もよく分かってんだけど。」

ラドナ生まれでラドナ育ちじゃねーせい、か、こういうとき、どうも雰囲気についていけないんだよな。なんでこんなに盛り上がってんだろ。さっきリアシアも言ってたけどさ、『花の女神』を決める大会の方が、普通盛り上がるもんじゃないのか？ それなのに普段領主様にきやーきやー言ってる年頃の娘さんたちですら、鶏の名前決めるのに異様に盛り上がってるのって、どうなの？ それでいいのか？」

「知りませんよ、そんなの。私、ここに引っ越してきてまだ1年しか経ってないんですよ」

「……慣れそう？ この、たまーにある変な祭りの空気とかに」

「……あと5年くらい待つてください」

元々はラドナよりも更に田舎の領地の小さな村で生まれ育ち、その後は王都で6年間暮らしたリアシアには、ラドナの住人たちの感性が未だに理解できないことが多々ある。皆、親切で仕事熱心な、非常にいい人ばかりなのだけにと。

これは慣れだ、慣れるしかないのだ——そう自身に言い聞かせつつも、まだ当分は無理だな、と思うリアシアは、しかし既にラドナに骨を埋めることが決定している。

リアシア・ティンベル。

今年の夏に20歳になる、薄茶の髪と灰色の瞳を持つ彼女は、死ぬまでこのラドナに縛られ続ける運命にある、ラドナの【塔】の主なのだ。

02：ラドナの春の感謝祭（2）

リアシア・ティンベルは、2年前まではエルリオン王国の王都バ
ラツツにある魔術学院に通う、魔術師見習いだった。

リアシアは11歳の時に、故郷の村を訪れた巡回騎士隊に追従し
ていた魔術師によって、自身の魔力を見出された。彼女は12歳に
なった年に魔術学院に入学し、以後6年間、一度も留年することな
く進学を続け、無事卒業試験にも合格した。

しかし現在、リアシアは魔術師ではない。

彼女は魔術学院を無事に卒業することはできたが、正式な魔術師
として認められるために必要な【正魔術師認定証】を授与されるこ
とができなかったのだ。

今のリアシアには、もう魔術はほとんど使えない。

更に言うなら、リアシアはこれから死ぬまで、このラドナの地を
離れられない。たとえ大地震が起きてラドナが崩壊しようが、大火
災でラドナ全土が焼失しようが、それこそラドナが戦場となろうが、
である。そうなった場合、残念ながらリアシアにはラドナと共に滅
ぶしか、選択肢がない。

リアシア・ティンベルは、ラドナにひとつだけ存在する【塔】の
主である。

【塔】は大陸南部の砂漠地帯を除いた、全ての土地に散らばって
存在している。

リアシアの所属しているエルリオン王国には、現在ラドナを含め
て22の土地に1つずつ【塔】が存在しており、その全ての【塔】

に主が存在している。

一般的に【塔】と一括りで呼ばれているものの、その建物自体はごく普通の民家だったり、あるいは城のようなものだったり、その形態は様々だ。ただ、それがどのような形態の建物であっても、【塔】がある場所には、巨大な魔力の流れが大地から噴出して、天高く渦巻いている。

本来、【塔】という言葉は建物ではなく、大地から噴出して、天高く渦巻く魔力の有様を指していた。しかし、魔力をもたない多くの一般人には、そのような魔力の流れは見えないため、いつしか【塔】は建物のことをも指すようになったのだ。

【塔】が最初に発見されたのは、今から500年ほど前のことだ。【塔】はある日突然、大陸各地に現れた。その凄まじい魔力の噴出に危機感を覚えて、当時の各国の王や魔術師たちはそれぞれ【塔】の調査・研究を行った。

そこでわかったのが、次のような事実だ。

まず、【塔】が現れた場所をよく調べてみると、そこは全て、今から900年前に始まり、その後100年間続いた、大陸中の国が戦争をし続けていた時代——『大陸大戦期』中に壮絶な魔術合戦が行われた場所だということがわかった。

このことから、大陸大戦終結から300年を経て、その大地に放たれ、蓄積された魔力が突如として噴出したのではないかと、という結論が導き出された。

そして、「この魔力の噴出を放っておいたらどうなるのか？」という疑問から、いくつかの国で実験が行われた。

なんとか魔力の噴出を抑えようと、封印術式などを研究する傍らで行われたこの実験はしかし、5つめの事例が起きた時点で一斉に

中止された。

即席の封印術式を施すこともせず、放置し続けていた【塔】はその状態で約5年ほど経った後、急にその【塔】がある地域一帯で、作物が全て枯れ果ててしまう事態が生じたのだ。天候不順などは全くなく、むしろここ5年ほどの間はずっと良作だったのに、である。そればかりか、その後にその地域一帯で突然地割れが起きたり、大規模な地盤沈下が起こったりした。幸い、作物が枯れ果てた時点で不穏な空気を感じ取った魔術師たちの提言により、その地域に暮らす住民を避難させていたため、人が死ぬようなことはなかった。

しかし、各国の王は「こりややばい」と感じて、各国で当時最高クラスの力を有した魔術師たちを一箇所に集め、協力して封印術式の構築にあたらせた。

【塔】のある地域のいくつかは、ラドナのように、その国において重要な作物の生産地であったり、貴重な鉱山がある場所だったためだ。

【塔】の魔力の噴出を抑えるための封印術式は大陸の地形の關係上、大陸北部の魔術師たちと南部の魔術師たちとで分かれて構築された。

大陸中央部に東西に広がる形で聳え立っているサエロ山脈によって、大陸が昔から南北に分断されていたためだ。

この地形的な問題のせいで、大陸北部と南部では魔術の発展形態が微妙に異なっており、距離的に考えても、南北で分かれて封印術式の構築にあたった方が効率がよかったのだ。

もつとも、昔から仲の悪かった南部と北部の国々が、互いに「いつそ封印術式の構築が遅れてあつちの国が崩壊してくれればいいのに……」などと思いあっていたことも、理由のひとつではあるが。

各国選りすぐりの魔術師たちは、己の魔術師としての誇りを守る

ことと、そのほか報奨金やら栄誉やらの目的から、北部も南部も僅か1年で【塔】の封印術式を作り上げた。

大陸南部の魔術師たちが構築した封印術式は、砂漠地帯に住まう流浪の民らの知識を借りたものであったため、それがどのようなものなのか、北部の国々には詳しく明らかにされていない。ただ、北部の国々が真似をするのは難しい術式なのではないか、と言われている。

他方、大陸北部の魔術師たちは、封印・結界・連結・思念・解放の5つの術式を複雑に組み合わせた、前代未聞の特殊な複合術式を構築した。この複合術式によって、大陸北部の国々はひとまず【塔】の魔力を抑えられるようになった。

大陸北部の魔術師たちの凄いところは、単に封印術式を構築するに留まらなかったことだ。

彼らは、どのような原因であれ、大地から魔力が噴出するなどということはやはり尋常な事態ではない、と考えて、単に【塔】の魔力を封印するだけにあることを良しとしなかった。

しかし、魔力を噴出させたままにしておくのも危険だということは、既に各国の5つの実験によって明らかだったので、『何か』を媒介にして、大地から天高く噴出している魔力をより緩やかに、かつ安全に放出させることはできないか？ と考えた。

その、媒介となる『何か』——北部の優れた魔術師たちは、何をとち狂ったか、特定の魔力を有する『人間』を媒介に選んだ。

単に【塔】の魔力を封じるだけではなく、1人の生きた『人間』の魔力を【塔】の魔力と結合させる、特殊な契約を結ばせる。

そして、契約を結んだ『人間』を介して、大地から天高く噴出する【塔】の魔力をより緩やかにゆつくりと、空中に拡散するように安全に放出する術式を発動させるのだ。——それが、大陸北部の魔

術師たちが構築した複合術式だった。

その、【塔】の魔力の解放媒体となるための特殊な契約を結んだ『人間』が、【塔の主】なのだ。

魔力とは、今から2000年ほど前に地上を去った神々が、時に気まぐれに新に生まれゆく生命に授ける、一種の祝福なのだとされている。

魔力の性質や大きさは、それぞれ個人差がある。それによって、どのような魔術が得意なのか、といった個性が生まれてくるのだ。

また、赤の他人同士でも魔力の性質が似ていた場合、一緒に構築して発動した魔術の威力が通常よりも高い効果をもつことは、大陸の長い歴史の中で実証済みである。

勿論、【塔】の魔力も、それぞれ性質に違いがある。また、【塔】の魔力と相性の良い魔力を有する人間も当然、存在する。

北部の魔術師たちは優秀だったので、複合術式を構築するついでに北部の国々の【塔】の魔力の性質を全て調べ上げ、それを記録水晶に打ち込んで保存した。更に、魔力の性質相性判定装置を、これまた各国それぞれの【塔】に合わせて製作し、複合術式と共に北部の国々の王に献上して、報奨金を5倍の額につり上げさせた。

当時の各国最高クラスの魔術師たちは、それぞれ非常に商売上手な人々だったようだ。

しかし、この複合術式には、【塔の主】にとって、3つの不利益な問題が存在した。

まず、【塔】の主となったら、ほとんどの魔術が使えなくなる。

これは、【塔の主】となるための契約によって、本来の放出の勢いを抑えられる【塔】の魔力と【塔の主】の魔力が連結されるため、主自身も魔力をごくごく僅かにしか使えなくなってしまうからだ。

「神の祝福のひとつである」と言われている魔力は、その魔力を

有する人間の生命力と密接に関わっている。

そのため、放出が抑制されている魔力を無理に使おうとすれば、本人の生命に多大な負担がかかり、結果的に【塔の主】の寿命を縮めることになるのだ。

それだけならまだいいが、本当に無理に魔力を使って中級程度のクラスの魔術を発動したせいで、実際に【塔の主】が死亡した事件も過去にいくつかある。

【塔の主】が【塔】の魔力を利用して大規模な魔術を行使するよ
うな事態を防ぐ、という点では優れているものの、【塔の主】は基
礎的な簡易な術しか使えなくなるため、【塔の主】となったが最後、
魔術師として生きる道を完全に捨ててしまうことになる。

次に、【塔】の主は、【塔】のある地域から一定の範囲を越えて
移動することができなくなる。

当たり前といえば当たり前のことだが、【塔】の魔力と【塔の主】
の魔力は契約によって結ばれているため、【塔】からあまり離れら
れない。魔力は生命と密接に関わっているため、【塔の主】は【塔】
から一定の距離を離れては生きていけなくなるのだ。

とはいえ、そこまで移動範囲が縛られるわけではないが、大体の
場合、【塔の主】は【塔】のある領地内から出ることができない。

あまり【塔】から離れすぎると、途端に体が動かなくなってしまう
のだ。これは複合術式にあらかじめ埋め込まれている効果で、【
塔の主】に「それ以上【塔】から離れたら死にますよー」と警告し
ているのだ。

しかし、実際にどこまでの範囲なら移動可能なのかということとは、
魔力の相性の良さによって個人差があるため、【塔の主】たちは【
塔】と契約を結んだ後、領主たちとどこまでが移動可能範囲となる
か、実践調査をする。

リアシアの場合、【塔】はラドナ東部の旧領主の館近くにあるも
の、ラドナは広大な領土のため、ラドナ全土の東から3分の2程

度が移動可能範囲だった。

最後に、ある意味最大の不利益となるのが、【塔の主】は契約によって生殖能力を奪われてしまう、ということだ。

【塔の主】に妊娠中の女性が絶対に選ばれないことと、独身の状態で【塔の主】となった者が生涯未婚のままに終わる場合が多いことは、この3つ目の問題が原因となっている。

この問題の正確な理由は未だに解明されていないが、【塔の主】の魔力に強い影響を与えている思念術式と連結術式、そして封印術式を組み合わせた結果生じた副作用ではないか、と言われている。

魔力は生命に密接に関連しており、そのため魔力は「次の世代を生み出す」能力にも関連しているのではないか、という推論がその根拠だ。

複合術式を構築した魔術師たちの何人かが、術式の構築中から発生の恐れを指摘していた問題であり、後に実際に未婚で【塔の主】となった者で、その後に結婚して性行為を行ったにも関わらず、彼らが1人も子を成すことができなかったことから、医療魔術の専門家が調査して明確になったのが、この問題である。

この問題が明らかになった当時は、国と【塔の主】との間でこの問題について凄まじい論戦が繰り広げられたものの、複合術式がこれ以上改良することが不可能なほど複雑なものだったことと、【塔】のある地域の安全のために【塔の主】が必要不可欠だったことから、国が【塔の主】に対する特権事項をかなり増やしたことで、一応決着がついた。

このように、大陸北部の魔術師たちが構築した複合術式は、1人の人間の人生を大きく捻じ曲げてしまうものだった。

たった1人の人間の人生と、様々な恩恵をもたらしてくれる土地の安全。

国を治める者たちが、果たしてどちらを優先するのか、ということ、これは考えるまでもなかった。

当時の国王たちは皆当然、土地の安全をとった——すなわち、1人の人間の人生を生贄とする複合術式が採用されたのだ。

以来、【塔】には必ず魔力を有する1人の人間が【塔の主】として住み込んで、巨大な魔力を抑えつつ、自身の存在を媒介にして、溜め込まれた魔力を緩やかに拡散させているのである。

現在、大陸北部の国々では、魔術師として一人前になるための修行が終了した直後の者——エルリオンにおいては魔術学院卒業直後に——に、魔術師見習いは必ず、どの【塔】と自分の魔力が相性がいいか、魔力の性質相性判定装置によって相性判断が行われる。

そして、見事に主不在の【塔】と相性が良かった者は、本人にどれだけ才能があっても魔術師としての道を完全に断たれ、【塔】がある土地に一生縛り付けられることになるのだ。

また、主がいる【塔】であっても、その主が不慮の事故により急死する可能性が無きにしても非ずなため、ある程度【塔】の魔力と相性の良かった者も、「【塔】の主候補」として専用の名簿に名前が載せられる。

【塔】との魔力相性判定で『当たり』を引いた場合——つまり、主不在の【塔】と相性が良かった場合、その魔術師たちは一般に『墓場行き』と言われ、無事に『外れ』を引いた魔術師見習いたちの憐れみや嘲りの対象となったりもする。

主が長年不在の【塔】の『墓場行き』に拒否権は、基本的にはない。断れば、下手をすれば国家反逆罪に問われて処刑される。

複合術式は主が不在であっても、ある程度の期間は封印効果は持続するように構築されている。その限度は約50年。

つまり、50年の間は、【塔の主】が不在であっても、一応は大

丈夫なのだ。しかし、それ以上は無理だ。【塔】を放置して、その結果起こった不作・地割れ・地盤沈下といった災害を防ぐためにも、【塔の主】は不在となったらすぐに、新たな主が決定される。

【塔の主】は自分の人生を国政によって捻じ曲げられるため、その不利益な点を補うように、貴族にも認められていない、様々な特権が認められている。

例えば、医療費が無料になる、納める税額が一般人の10分の1でいい、毎月国から一定額の生活費用が支払われる、【塔】の建物の維持管理費用は全て国庫負担とする、などなど。他にも、【塔】のある地域の領主によっては、独自の特別な取り計らいをしてくれることもある。

リアシア・ティンベルは魔術学院を卒業する18歳のとき、【塔】との魔力相性判定で見事に『大当たり』を引き、ラドナの【塔】の主となった。

しかも、彼女は適合率が通常6〜7割のところを9割超という相性の良さだった。

リアシアにとって幸運だったのは、彼女の生まれ故郷がラドナ地方よりも大田舎のフェルミナという王国西部にある小さな領地で、その村で暮らしている家族とは不仲でほとんど縁が切れていたことと、彼女自身の魔力が中級程度で実力も平凡、おまけにリアシア自身が魔術に対してそこまで情熱がなかったこと、特定の恋人もおらず、更に実家との関係が悪かったせいで「結婚」や「家庭」についての欲求がほとんど存在していないこと、そして何よりラドナ地方が実に過ごしやすい土地で、なおかつラドナの【塔】が42年も主不在で危険な状態だったため、リアシアの存在が領主であるアデルード公爵を始めとしたラドナに住まう人々に温かく歓迎されたこと、である。

リアシアはまず、【塔の主】となることが決定した際、エルリオン王国の魔術師たちの長である宮廷魔術師団団長に掛け合って、エルリオン王国の法に則った正式な手続を踏んで、自分の実家と完全に縁を切った。

リアシアがラドナの【塔】の主となって一番よかったと思っていたことは、実はもう2度と自分の実家に帰らなくてすむようになったことだった。

リアシアがラドナの【塔】の主になることが決定した際、アデルイード公爵は若い娘が1人でも暮らしやすいように、それなりに古くなっていったラドナの【塔】の建物——普通より少し大きめの、庭付きの二階建ての民家だった——を大急ぎで新築同様に修繕して、家財道具も新たに一通り揃えてくれた。

それがリアシアのような庶民にはとても手が出せないような王族御用達レベルの超高級品だったため、リアシアは引越し当日に家中を見て失神しかけた。

また、アデルイード公爵はリアシアの「なんでもいいから仕事が見たいんです……」というお願いを笑顔で聞き入れてくれて、リアシアの移動可能範囲にあるシュレ区の図書館の司書の仕事を紹介してくれた。

おかげで現在リアシアは、国から毎月支払われる決して少なくはない生活費の他に、図書館司書としても収入を得ている。

当初、リアシアは司書としての給料はいらない、あっても少額でもいい、と申し出たのだが、そこは領主と領民が一致団結して説得に来て、リアシアはありがたく司書としての給料を頂くことになった。

働かざる者食うべからず の考えが浸透しているラドナにおいて、きちんと働いてその分の収入を得ることは当然のことである。

また、リアシアはこれから一生ラドナで暮らしていくため、彼女

が【塔の主】以外にきちんとした職業をもち、それによって収入を得ることも、いたって普通、当然のことなのだ。

その言葉に納得したリアシアは、せっせと司書収入を貯蓄しつつ、日々有意義に過ごしている。

リアシア・ティンベルにとって、【塔の主】という役目は、それほど不便で悲惨なものではない。確かに、移動範囲が限られてしまったり、魔術が使えなくなったりしたことは、多少不便ではあるのだが。

しかし、リアシアにとって【塔の主】の役目はむしろ、仲の悪かった実家と完全に離縁できるよい機会となった。

それに、ラドナは王都ほど刺激に溢れてはいないものの、まったくとして非常に住みよい土地である。領主が横暴な貴族ではないこともありがたい。

また、ラドナの人々は皆、40年ぶりにラドナの【塔】の主となつたリアシアに、本当にとっても親切なのだ。野菜や肉、卵など、普段の食料をわざわざ持ってきてくれるし、生活の中で分からないことがあれば、何でも快く教えてくれる。

故郷の仲の悪い家族との関係や王都のある種ギスギスした人間関係に疲れていたリアシアにとって、このラドナの地に骨を埋めることに、何ら異論はない。

ないのだが。

「よっしゃあああ！！ 投票の結果、今年の『花の女神』は、華麗なステップとターンを披露してくださったカザシユ区在住のエリザさんに決定いたしましたあああ！！」

「エリザ——！！ てめえいい加減にしろお——！！」

「ババア——！！ 75歳で『花の女神』大会に出場してんじゃねえ——！！」

「ホーツホツホツ！！ お黙り、乳臭い小娘ども！！ 悔しかったらあたしの踊りを超えてみせるんだね！！」

「ちなみにエリザさんはこれで3年連続の『花の女神』となります！！ おめでとうございます！！ みなさん、エリザさんに盛大な拍手をどうぞ——！！」

「エリザ、素敵だ——！！」

「来年も出てくれ、エリザ——！！」

「うるせえ男ども！！ あんたらはなんでエリザに投票するのよ馬鹿あ——！！」

「来年こそは見てなさいよエリザ——！！」

「ホーツホツホツホ！！ 来年も『花の女神』の座はこのあたしが頂くからね！！」

暴れ鶏の名前が決定した後、ようやく開催された『花の女神』を決める大会（通称・花の女神決定戦）において、3年連続で『花の女神』に選ばれたエリザ（75歳・果樹園経営・ふつくら体型）と『花の女神』の座を逃して悔しがる可愛らしい娘たちと妙齡の女性たちを見つめながら、リアシアは思った。

王都にも似たような大会があつたけど、あれは参加者は未婚の若い女性だけだったな。それにしてもエリザさん、あの年齢でよくまあ、音楽に合わせて空中三回転とか決められるなあ。あんな踊りができる女性は、王都でも大道芸人くらいだったな！。

確かにエリザの踊りは素晴らしかった。去年、観覧していたリアシアや他の人々が絶句した空中二回転よりも技の難易度をあげてきていたし、相変わらずステップとターンの華麗さと優雅さは他の参加者の追隨を許さないものだった。

だからって、投票した男性諸君や大会不参加の女性たちよ。

およそ16歳から25歳までの、可愛らしい女性たちの踊りを差し置いて『花の女神』に選ぶか、普通。

エリザは去年と同じく、圧倒的多数の支持を得て、見事に『花の女神』に選ばれていた。次点の女性（未婚・18歳・ルタ区のパン屋の可愛い看板娘）の得票数の5倍の票を得ていたのだ。

何故だ。何でエリザ。確かに凄かったけど。夢にまで出てきそうな迫力ある踊りではあったけど。『花の女神』という雰囲気だったか、あれ。

リアシアは考え込むも、いまいちエリザに投票した人々の心理が理解できなかった。

この、「ちよつと、どうなんだろう……」と思わず考え込んでしまう、不可思議な熱気と感性。

別に、何歳の女性が『花の女神』に選ばれようと構いはしないのだが、リアシアは「何か違うくない？」と疑問に思ってしまう。

リアシア・ティンベルは、ラドナの土地も、そこに住まう人々のことも、とても気に入っている。

しかし、彼女がラドナに馴染むのにはまだまだ時間がかかりそうだなあ、と思ってしまうのは、ラドナの住人たちの、この不思議な感性がリアシアの感性といまいち一致しないからだ。

それは別に不愉快なものではないのだが、時に多大にリアシアを困惑させる。

感性——それは場合によって、「常識」とか「良識」とか、そういう風に分類されるものでもあるので、ラドナで生まれ育っていないリアシアと生粋のラドナ生まれ・ラドナ育ちの人々との間に、心理的に埋められない距離ができてしまうのは、ある意味しょうがないことなのだが。

「いやー、今年もエリザさんは凄かったなー。特にあの、空中三回転！……俺、次はあれの絵、描こうかな……。描きたいなあ……。エリザさんの空中三回転……。描いたら売れると思う？ リアシア」
「知りませんよ、そんなの」

ふつくら体型の75歳の女性が空中で華麗かつ優雅に回転する様を描いた絵が売れるのか？

芸術に疎いリアシアには、全くわからない。わからないが、リアシア自身は特に欲しいとは思わない。

しかし、貴族連中の中には変わった趣味の人物も多いらしいので、そういう人間に持っていけば売れるんじゃないかな、と思った。

というか、そもそもアルが何故そんな絵を描きたいと思うのか、それもリアシアには理解できないのだが。

「描けたらあげようか？ 題名は『エリザ・75歳、空中に舞う』で」

「絶対にいりません」

リアシアの冷たい拒絶にしょぼんとした顔をするアルを無視しつつ、リアシアは舞台に目を向ける。

舞台の上では、『花の女神』に選ばれたエリザに、麗しのラドナ領主であるアデルイード公爵が、いつもどおりの春の陽だまりのような柔らかな笑みを向けながら、『花の女神』を称える春の花々で作られた美しい花冠を被せていた。

エリザも司会者もさっきまでエリザに怒鳴っていた女性たちもその他の観客も、全員領主の存在にうつとりとしている。

「あー、相変わらずいい顔してんなー、領主様。いいなー、俺もああいう顔だったらさっさと嫁さんもらえてんのかなー」

「絵描きなんて安定した収入のなさそうな職業してる人には、一生無理なんじゃないですか？」

「ガーン……。リ、リアシア、俺の描いた絵、見たことないくせに……」

「アルさんが見せてくれないんじゃないですか」

「だから、『エリザ・75歳、空中に舞う』を描いたらあげるって言ってるじゃん」

「それはいいりません。見たくもありません」

「ガーン……」

完全にしょげてしまったアルを放置して、リアシアは、春の感謝祭最大の催し物である広場全体を使用した舞踏会——といっても、音楽に合わせて皆が自由に踊るだけのものだ——の準備に沸く広場を見つめる。

いつかリアシア自身も、ラドナの人々と同じように、こうした行事で馬鹿騒ぎできるようになったらいいな、と思いながら。

その場合、リアシアの感性が一般の基準とは少しずれてしまうことになるのだが。

幸か不幸か、彼女はまだ、その事実には気がついていなかった。

そうして、ラドナの春の感謝祭はその日、最高に盛り上がったまま、無事にお開きとなったのである。

00：【神】の話

——うん？ 君は誰かな？ この街の子かい？

……そう、その店の名前は知らないけれど、その息子さんなんだね？

え？ 僕？ ……うん、君が今言ったとおり。僕は一応、貴族だよ。

そうそう、暇を持て余してる貴族の若造さ。それはその通りなんだけど、君、口が悪いねえ。僕じゃなかったら「不敬だ」って怒られて、鞭打ちにされてしまうかもよ？ 横暴な貴族も多いから、口先だけでも礼儀は守らなくちゃ。

それにしても、君、学校は？ この時間帯なら、王都の街にいる君くらいの年の子は、皆学校に行っているはずだろう？ 貴族とか、お金持ちの商家の子弟でもないかと、家庭教師なんて雇えないからね。君のその身なりじゃ、無理だろう？

はは、怒らない、怒らない。そう、今日は学校をサボったの。駄目だよ、勉強はそれなりに大事なんだから。田舎の地方じゃ、未だに庶民が通える学校なんて全然ないところが多いんだからね。君は学校に通える機会があるんだから、それを最大限に活かさないかと。……ふうん。学校が退屈なんだ？ それで、君は僕にそんなことを言つて、一体どうして欲しいの？

………はあ？ 話をしろ？ 話つて、一体何の？

……暇つぶしになるならなんでもいいって、君ねえ。

……まあ、いいよ。僕もどうせ、暇だしね。君の暇つぶしに付き合つてあげるよ。

それじゃあ、君、そこに座りなよ。まさか立ちっぱなしで話を聞くつもりじゃないだろうね？

——よし。さて、じゃあ、まずは何から話そうか。

そうだなあ。じゃあ、まず最初は――

君は神様について、どれくらいのことを知っている？

恐らく、名前くらいしか知らないんじゃないかな。残念ながら、僕も神様については、あまり詳しくない。

彼ら……といっても男神と女神として性別が分けられてはいるものの、実際に神に性別があるのかはわからないんだけど、とにかく彼らは、【世界】を創ったのだといわれている。

そして、その時それぞれが創生に関わったものにちなんで、「の神」という名前がつけられているそうだ。

神々の仕事は一応、【世界】の管理らしい。

具体的に、それがどんな仕事なのかは分からない。ただ、【世界】の管理をしている、ということしか、僕たちには分からないんだよ。

かつては一時期、地上に降りていたこともある神々だけど、現在は地上を去っている。

今、地上を去った神々がどこにいるのかは誰も知らないが、きっと【世界】のどこかにいるのだろうね。

さて。神は全部で12柱存在する。

うん、神の数え方は「柱」なんだ。恐らく、「神は【世界】を支える柱である」という考え方からきているのではないのかな。

じゃあ、12柱、全ての神の名前をあげてみよう。

時の女神 ルクスカンテ
天空の神 カロリオット
太陽の女神 オルステス

月の神 キルヴァーン
星々の女神 アナテミア
海の神 ジュディスト
大地の女神 エディスライア
風の神 ウルケ
花の女神 ジエニーレイ
火の神 ベルトヒアド
誕生の女神 キュルスカニア
終焉の神 ラプリカンス

これが全てだ。なかなか発音しにくい名前もあるけれど、童謡などで有名だから、子どもでも知っているね。

さて、神々は名前以外、どのような容姿をしていて、どのような力をもっているのか、ということなどについて、詳しいことは、ほとんど何もわかっていない。一応、何らかの力は使えるようだけれど。例えば、火の神ならどこでも火をおこして燃やすことができた、海の神なら波を荒らして津波をおこしたり、ね。まあ、ほとんどは人間にとって害にしかない、何の生産性もない無意味な力だけだ。

何故なら、人は神に教えられずに、火の扱い方を学び、作物を育て、天候や方角を空で知り、海を渡り川を治める術を身につけたのだから。

人間は知り、学び、そして創りあげる生き物だ。ともすれば多大な力によって大陸を滅ぼすような、神のように万能な力はなくとも、ちゃんと生きていけるんだよ。

人間は、木偶人形ではないからね。自分が生き延びるためには何でもやるし、そうやって長い歴史の中で、あらゆる知識や技術を発

展させてきたのだから。

「陛下、船を出すのは無理です!!」

「もう王都内に、すぐそこまで火が迫っています!!」

「……仕方がないか。姫をここに連れて参れ」

「陛下?! 一体何を……」

「姫は逃がす。姫はまだ8つになったばかりじゃが、強く賢い子じや。妾は女王ゆえ、この国と民と共に滅ぶ。しかし、姫は他の大陸に逃がす。月神に祝福された我が王家の血が流れている子じや。それに、姫には特に強い加護がある。他の大陸に行っても、姫ならば生き延びよう。そして、この国のことを、ずっと覚えていてくれよう」

「し、しかし、我が国の魔術師はもう、陛下以外におりませぬ!!
そのような状態で転移の術を使われれば、陛下のお命が!!」

「よい! 妾の時間がもう少ないことは、妾自身がよくわかっておる!! 妾のことはもうよいのじや! 早う姫を連れて参れ!!」

「陛下……」

「……すまぬな。お前たちの命も、お前たちの家族の命も救えぬ女王が、自分の娘だけを逃がそうとして。許せ、とは言わぬ。じゃが、妾の最後の我儘じや。どうか聞き入れてくれ。500年もの間、月神に愛され続けた我が王家の血を、どうしても残しておきたいのじや。たとえ、妾とこの国を滅ぼすのが、月神そのものであったとしても……」

神々の名前だけは何故か、昔からこの大陸にも、子ども向けの歌や物語として伝わっていた。神々の名前は、全て、どここの大陸でも同じだった。

それなのに、神々が一時期降臨し、そして人々と共存していた、今はもう滅んで存在しない北大陸で生まれて、後に他の大陸へ移って行った人々ですら、何一つ神々の容姿などについての具体的な記録や資料を残していないんだ。

これは一体、どういうことなんだろうね？

そもそも、神々の名を伝える歌や物語についても、それらを一体誰が作り、どうやって広めたのだろうか。

広大な大陸の中で、そこにある全ての国において同じ内容の歌や物語が、ずっと変わらずに伝えられ続けることができるのかな？

今はもうこの東大陸しか残っていないけれど、昔はこの【世界】には、北大陸と西大陸も存在していたんだよ？ それなのに、その全ての国々において、神々を伝える歌や物語は全く同じものなんだ。古くからある伝承というものは、よほどきちんと管理して伝えられない限り、どこかで必ず改変されてしまふはずだし、地域によって違いが出てくるものだろうに。

ね、変な話だろう？　むしろこの事実こそが、人が行うことができない『神の力』というものの一端なのかな。

ああ、神々の記録……というか、実際に起こった歴史については、例外が1つだけある。その話についてだけは、神々の話がきちんと残っているんだ。

それは、神々が起こした争いについての話だ。これも詳しい内容は分からないけれど、争いの概要は、当時北大陸から戦火を逃れてきた人々によって、他の大陸に伝わっている。この話によって、神

々についての具体的なことはわからないけれど、その一端に触れることはできるよ。

何故なら、北大陸は、この話に伝わる内容——神々の争いが原因で滅んだからね。

そうだ。僕があげた神々の中の最後の2柱の神、誕生の女神 キ
ユルスカニア と終焉の神 ラプリカンス について。

この2柱の神が司る『誕生』と『終焉』、これは何を意味するの
か？

一般的には、人間や動物たちの生命の『誕生』と『終焉』を意味
している、と言われている。

だから、人々は葬儀の際に、あるいは新たな命の誕生の際に、こ
の2柱の神に祈りを捧げるんだよ。

去りゆく命に安寧が訪れるように。生まれてきた命に感謝をこめ
て。

この【世界】では、生は常に死と共にあり、死は常に生と共にあ
るものだからね。

ああ、結局、神について、具体的なことは何もわからなかったか
な。でも、資料も何もないのだから、しょうがない。

それに、所詮神様なんて、僕ら人間には大して関係のない存在だ。
だって、神がいるのかいないのか、それ自体が不確かであっても、
【世界】は今日も続いているのだからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2393i/>

ラドナの塔の主

2010年10月8日23時33分発行